



太鼓に魅了された女性たちの力強く、勇ましく、そして繊細な演奏。その音色やリズムの多様さに驚かされる。



空気を揺さぶり、
とどろく響き
打ち手の感性が
魂に届く響きを創り出す

手児奈太鼓

魂 の奥底まで揺さぶるような
どんの響きが、全身に伝
わってきます。振り下ろさ
れるばちが創り出すリズムとその音色
引き締まった腕が上下するたびに緊張
する筋肉の美しさに、誰しもが陶然た
る心持ちで引き込まれていきます。

夏の風物詩、真間・手児奈霊堂のほ
おずき市で披露される手児奈太鼓は、
もともとはまちの活性化を目指して始
まった「手児奈祭り」が出発点。お祭
りの企画に携わった番場多美さんが



弘法寺から太鼓ばやしが練り歩き、祭りに華を添える。

「太鼓がやりたい」と思い立って始め
た女太鼓です。10年を経たいま、新た
な文化としてすっかり市民の間に根を
下ろしました。「次の目標は100年

先！真間の伝統にしたいので、子ど
も太鼓塾も定着させたい」と熱き思い
を語る番場さんは、現在ディレクター
として手児奈太鼓を支えています。
弘法寺の祖師堂で行われる週1回の
稽古では、メンバーがうれしそうに太
鼓に向かいます。手に豆を作りながら
も、ひとたびばちを手にすると、いき

いきとした表情に変わります。リズム
カルなばちの動きは次第に早くなりま
した。ますます高らかに響き渡るとど
ろきは、祖師堂の壁が崩れ落ちるのだ
はないかと思うほど。魂を解放し、自
ら喜びを得ることが感性を磨き上げ、
魂に響く音を生み出していきます。

複雑な拍子を練習し、伝統にとらわれない創作太鼓の基礎をつくる。新しいリズムを覚えることも楽しい。



スキー以外にも族で集まる機会が多い。これも健康的な家族をつくる秘訣。



左/「子どもも安心して楽しめるように、スノーボードのいないスキー場選びが大切」と色摩さん。
下/色摩さんが9歳の時に使っていた板。



上達のコツは
「また来たい」と思うこと
家族総勢9人で
スキーを楽しむ

色摩三紀雄さん一家

山 形県長井市の出身だけあつ
て、物心ついたときからス
キー板を履いていたという

色摩三紀雄さん(57歳)。(財)全日本
スキー連盟の評議員も勤めたスキーの
達人です。スキー教室で指導をしたの
が興様の節子さんとのなれそめとい
うことですから、根っからのスキー一
家に違いありません。長男・毅彦さん
のおむつも外れない頃から家族で冬
の山を楽しんでいたそうです。

一家の伝統・家族スキーは、長男一
家、次男一家を含め総勢9人が、ワン
シーズンに必ず1回はそろって出掛け
る行事になっています。「冬の間はス
キーの仕事が忙しくてほとんど家に

ないんですよ。だから、その罪滅ぼし
で家族サービスを始めたんです」と色
摩さんは笑います。

「リフトで上がった孫たちを、私の板
の上に乗せて抱えるようにして滑り降
りてくるんです。もう喜んで、もつと
滑ってと大騒ぎ。楽しいから、また来
たい」と思うようになるんです。スキ
ーは自分に合ったバーンを選ぶことで、
子どもから高齢者まで生涯スポーツと
して楽しむことができるんです」と色
摩さん。

親子3代、スキーを通して絆は深ま
り、健康で明るい、笑い声の絶えない
色摩さん一家です。